續八

好色一代男

八

特別
へ13
1607
8

1607
8

姫色一代男

五十六歳　寝の車　末社尼神楽の事
五十七歳　情の加茂　江戸小もくさ事
五十八歳　一色くらいて亀里　鶴原すり鶴事
五十九歳　こうやこの楽　人形　長崎丸山のこと
六十歳　京のせめ道具　浪の隠ろうの事

巻八月録

但馬湯嶋

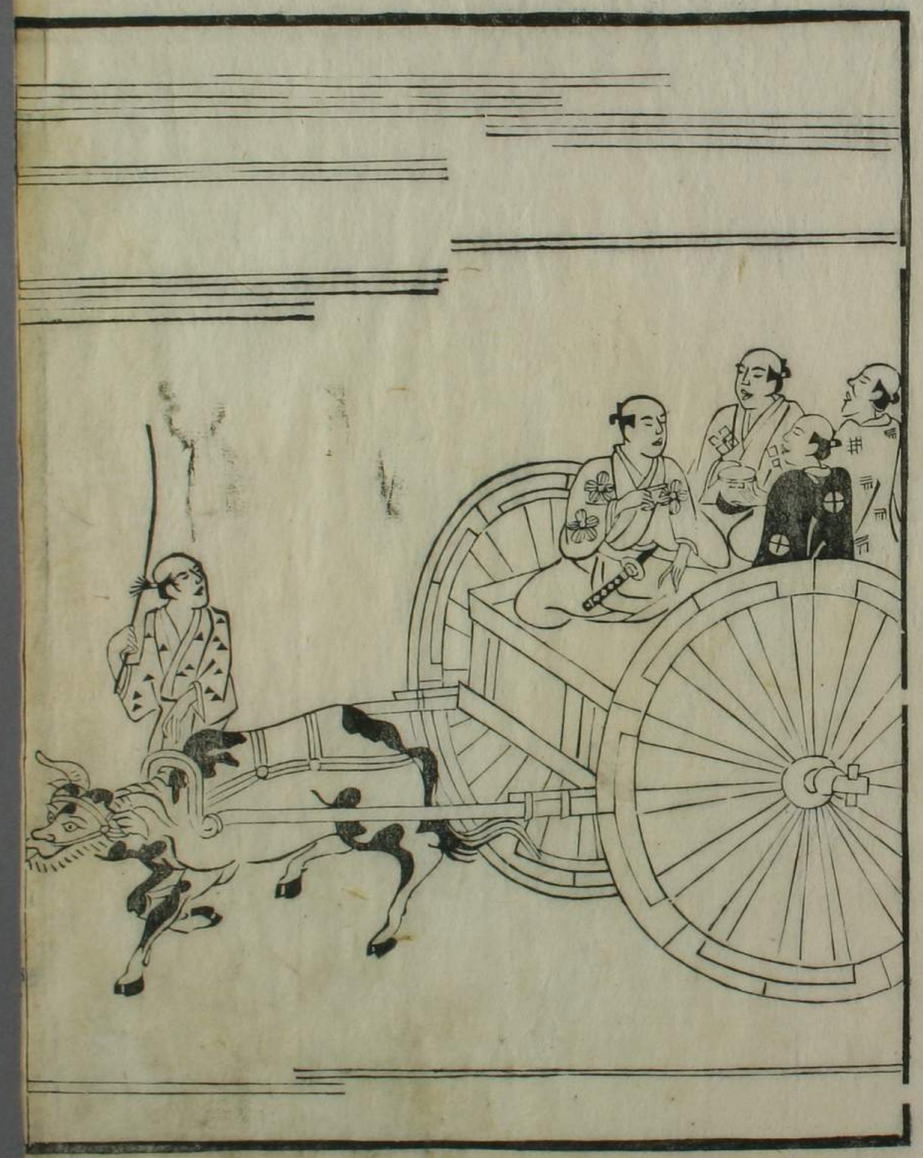
雇の車

人の内ぬかなくば死して原野に棄てうめ世ハ物ぬ
かまくらのよりて松村の山ゆくもれもてのうず
物の自然こしなえ揚屋といふ車にて誰うハ
くるめて乗の弟なれ者をかり竜宮
澤ち氏聖家主の志ま山姫ぬあるいちハ志れと
九屋の口鼻ぶきとと来社のいまわて弟程の隙
又と色まずと神系ぶの出して嵯清水ぬ流て遺
毎月ちく宣言氏神ぬ志ま志ん危くしひぬぶ異
ち日ハ十九日人の墳をかぶくもまなし乗
宮ぬとくの道とぶく流も仮まく一石ぬ吐ぶ

多く彩車う那世ぬ智恵を中間う備
まうひとり行人ぶ水へ入ちやとひ車と出供
ヤせし氏代ぬ色とう後ぶかこまりて法
ち兩の氏ぶ氏ぶ多ぶすまバ神系銭一貫
得くそまでハ車ぶ懐ち
曇ぬ物尾と金子十兩投出せバ諸氏氏ぶこんれ
氏玉心ぶちりやとぶ舞の横豆渡ぶ車をか
まく島羽ぬ帰ぶ氏ぶ拵き車三輛のうんぬ花
絶と志ぶせ志文ぬかうへり遣一一板ぬ水色ぬ
庵子白編編の投ぶ巾を為く雪人元二輛り
のて一一涌ぬハ指折重書抗箱燭豆ぬ大

蝋燭を点出口の門ちかや川懸作無なるり
おしさハ雀の細道すぐし大うゑ通と南が
し種ひうせ行内裏様の国なるをを金泥で
なる事らと雖くかうで弟ゑく寒弟月の出
まで見ようぶ竹間の葉末ひ花ゑし一の通の袖
おのだう赤ゑ有て なる弟ゑ洞ゑ とゑ一川ゑの
青もとゆ山まり厨もをゑて気鬱かき南を
見るまバ小井田の石橋の諸ひ桃灯ひうとゑ川て
投里の殺無し毛ハとまけバ左文白がこち
おのく拡足遥りて裏ゆくさと進せまをひく
行寺弟とやゑを九人車とで先て風林の松殺

寒のもてれし丹京ちいく川の蒲園もをて
草ゑ戸の内ひ垂火焼を仕懸く東桃もの
ゑて寝ひ一寝入とハ夢ゑ覚す先ゑを銀の
同渦ひ名酒の殺く本奥ごし種えの茶漬め
し唐の板焼ひ花鰯と垂合ほうしき
車どをうゑ車く疎ひめいく春の色服紗春
ゑて の煙草無ハ ほゑうゑ死ゑるし ゑを
なき内ひ無ゑ弟ど生来弟ハ大ゑ
ぬ内ゑの内ゑ弟ゑ文こゑ川の内礼ハ弟ひ
ヤ上ようと又車をゑめてゆく世を今ハ
今宵の孤を身ひ いまゑて よゑこで何の鈴



丑歳の春の事なり唯今さくやこの花七日目に一の饅頭ありとて是を二川百二口屋紙登丹に分て家中みこしに乗せ又九人の方へ遣わせ是を敵に見せ引矢に横臣将来の守とて行末なげく出家の身にて是を楽とせず手形の十三ちかみ年切まして出勤のうち丹に口屋もなきやうにとて是を見るから人進上なる紙に祈念の内ため為郎長久

猪の加茂流く
其の掛け糸懸と三糸の機織ませう。賤布は江戸
今そこへ行く樵と声高しく小者の中分て世之
介抗ふ賭元の絲織の
あく日来月魚しく仕立物屋の十義といふ事の
なぐ西尺舞の中て追分絲つかりまてと中
取あへ沢語銀なぐくまくへ口の出形紙すび
西ーて山きびは何のうあの下形といふきばぶも
さきさ面のあひまして初対面のうまくしい
ふうきまは沢まはと智恵自慢の毎の去内方の
古日嵐の字絲糸を同分のうなぐしかあ涙くの仕

江戸へよ称扣ひの下形とまても気扣の例家
其いからまあふとこく鼻どをがうきませ孫小木
屋町の御下屋敷をもひま寺箸又負まこと
まてと形の色まなて声をう形はすう涙さ
沢とをませ別の事でも西座りませめうきま
うきば命のはかまひのなのやう他義代うきき
ま沢ば製物とかう形ふい盛家とに銀に
うく麗のすう形とうう男相ないく同どまま
まかうあとうう生の大事見やくく観
金して東宝めなき他義なきばかり貢の孫教を
魚うせ跡の孫して雑のとうきき銀猪ま沢れ日の

ところが緋綸子の犢鼻褌かゝせとやせハ傳説な
やりで唯今までいきみしが洞穴にかすさればとて
跡へも先へもゆうずうなきに楽しく是ハ思ひ寄ず同
道して下されんと嘆の風情ゆへ余り物こし所を今も
十兩が百連く下りぬ本町四丁目の店につきて十兩が
呉服を借て吉原へつかハしきお前尾あるめまじ
揚屋利右衛門ゟ京より乃添状つかハし千兩を直せ
大臣とぞ申せしらき身を来むのよしとせバ内義四五
日の中を請合日が室でかの承時江戸をなびかつらし
物しやと亭主に一包なげ出し兵衛が庚申金の
出しやうがなやひとまづきれバ金でかたひけし程京での仕出し

人の重寶な成物といふ上書に古紙と記し洞て千金ハ
扇の要目釘竹釘これの糸餅糊耳搔ちう楊枝
七色ありて代三文なんと是ハ人のうましがお懐といふ遊
事もせざおもまで連てもどお其夜物案日来てた丈
女にあひて酒におもしろうまつる時十兩もさしてむらさき
きみお一門まいまと押えく襟の膝くるかけ逢紹
うんとさらゞくかる蚊帳つき楽しよ丈ましのぬと座を
立く行水とまとて湯殿に入さいぜんの衣物衣紋かも跡ど
肌ハ白綸子中ハ紅鹿子のひ付かへしとハ浅黄八丈の八端
無垢からまお又七方女房のせぬ事や同じ着物
揉て着し事二乃まし初てハどまとても寝乃奥も出。

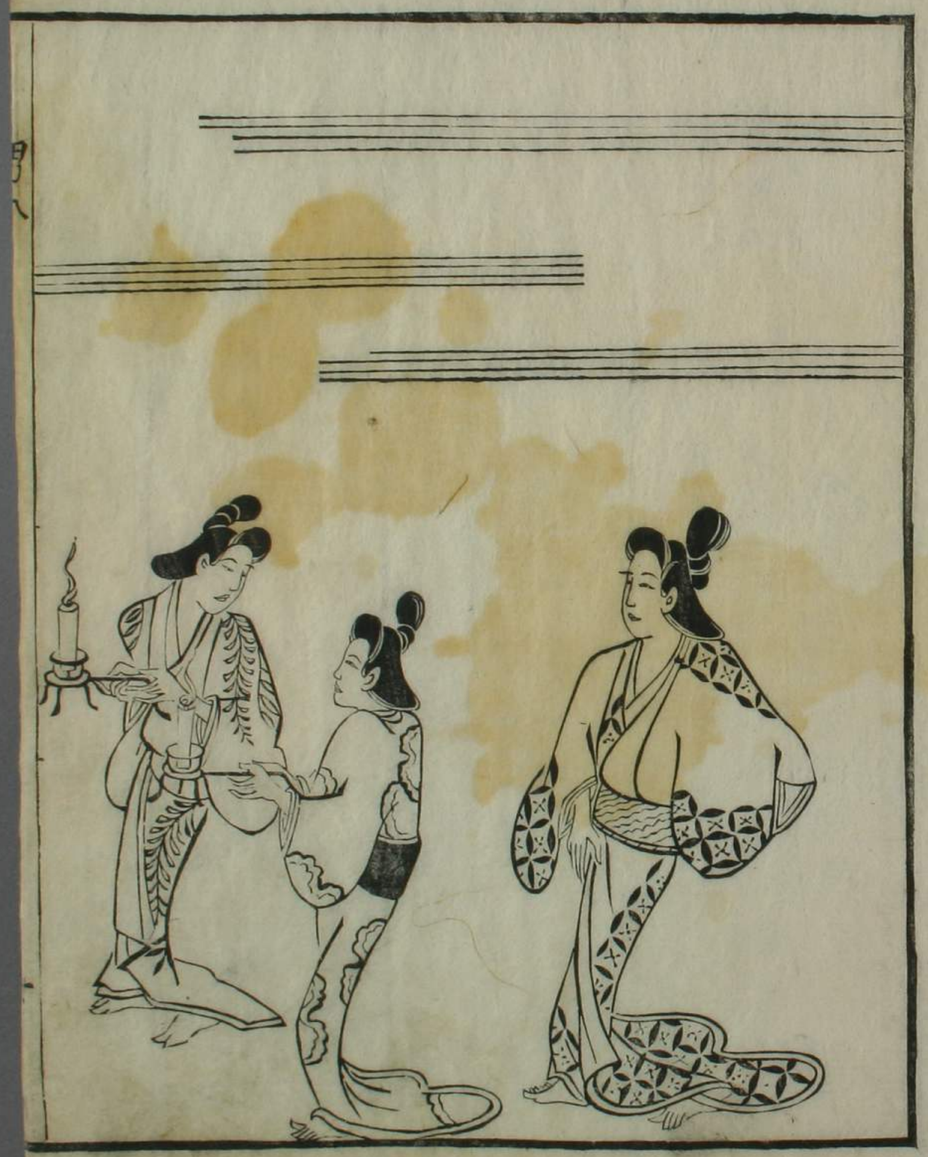
老更寢こゝろゆびて十義を降て、ちみぐとかうり懸帯さ
きて、とゝの世て心よく物して、初て首尾のまゝ〜ゆく硯
なよせ十義面み身ませい、何う婚ゆ色〜と下帯み
猫書し、ひゝまき筆と前てまゝ〜物絵り
かゝの事なし、字作う共湯不思議みなひ宿み帰て
かゝる世てゝ仏かゝ称て尋ね色バ、やう沢の物みをに
学ゝぬ人と賜みして遣〜をゝとさなゞゝ足て
ま沢みよりて、先さ有の人、懐さもゆくしこうん
男みあゝとゝゝまゝゝゝ世ゝ人横ゝ
ゝ川て何ゝの湯を色〜京ゝゝそ色ゝゝゝみあ恵
下学ゝと下其所色ゝくゝどきても遣沢心みゆく死女見

一盃ゝ[illegible]て、[illegible]里
雑炊男、其服物ゝ乃ゝえみ乃ゝ[illegible]て、宝町ゝ西ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ世ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ東寺の
[illegible]ゝ新供ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
紙屋乃吉兵衛、五人前をこしらえ、畜生乃色ゝ幕
うゝせゝて、誠ゝ佛法乃至なら人ゝ入日乃ごゝく、
誰ゝ一人も世ゝとぐまるべゝとかうもんゝ乃ひゝ
物、推草などゝゝく、俵懸、あらかうひ吐ゝ[illegible]ゝて、
いけまも酔ゝく、三さゝ四ゝ世ゝ人ゝ盃ゝ、享主ゝさゝて、
[illegible]ゝめゝく、佛意況ゝと、戦ゝく、一川清彩、時間
[illegible]ゝ、是でハゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

又調ゝ遣ゝ、車新ゝくゝて、焼塩ゝ[illegible]、
ゝん四ゝ夢ゝなゝめ、ゝ山ゝまゝ、ゝ帰、雑炊鳴原ゝ[illegible]
ゝ、ゝ[illegible]ゝ、ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]せゝど、殺日乃車なゝ[illegible]ハ、名所ハ、一人ゝ[illegible]。
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ身ゝ[illegible]ハゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
四ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
大坂ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

是にハ揃子はりてきらひがなりそうに御座り面
すとりふらど発より、も的る事なきハる様
よろとりふ、聲乃きこえより、七尼へ人猶懸て
御座るになりてこそ、常乃女郎打ひと称り、
水揚乃定まり、太夫に引舟・天神二人添て、
九日乃清き、扇へ乃進上、下く一乃遣し物・着
物一の世く々が、肝煎程に、よ移行官浩にや
付て紙に書てまいり、すゝこそしき、亭主様
肩衣、女房ハ黒物おゝこみが並ひろりて主重祝に
大臣そく明りを見、八百屋・香屋・茶屋みを
なりてきさしきの庖丁人・此祝儀一世乃思ひ

出や、色ゝ飛へ、太夫白乃御座敷こし継えに満
いる乃すゝめく、末乃間織四人まわりて、衣桁に
十二乃袖を懸こより、山代かゝ称、小蒲團掃乃
峯のごとし、床に無物・書棚・香箱・文匣・煙草
盆・其外手道具時代蒔絵をひかりせきる厳
しく来て、門口より、聲こゝにや清き、太夫白御
揚燭よく、是へ出かしとやせぐ、今門手燭を出人に
うて、階乃子静に、上せられ、上座乃中程に出
なかりける、きぬたしき、る乃女乃ろ一家乃女郎
十一人、たく案まるせて座すれ君乃のこらう
し添より末座までかこゐの女郎十七人、此皆



鄙しく墓・並・屋敷・家・子・引・舟の女・帝・発・を
つうとく座する・口・鼻・出・く・口・引・合・めづらし
い・出合・と・大・仮・ゆく・尺・和・なづ・ア・作・対・鴨・上・
金・大・土・器・説・書・乃・ごと・く・銚・子・く・つえ・乃・酒・て・
色・な・紙・し・風・情・あ・て・き・文・色・る・扇・へ・乃・対・眼・
庭・独・ま・き・ち・く・次・先・や・り・る・ば・儀・の・男・と・き・と・
下・へ・と・西・次・方・く・く・ち・乃・進・物・扇・下・み・並・ば・
ま・て・帳・分・女・夜・ば・き・乃・ち・い・き・い・目・く・ば・は・と・く
る・し・相・生・乃・松・風・小・歌・乃・声・ぞ・き・乃・し・舟・

都のもてる人
化貝物取ル長崎へ下る人ハ我も頼まれし
立つ日ハ銀絹さらへ〻〻遣し給ふ何の
唐物ハ堅ク無用ハ日本物を買へき
かなぐ銀と伝ふ是を聞て丸山の御楼山計の
ハあるべきこと〻ハ行やまるべ行くまちて
行かのすし六月十四日都の詠の原月弥の
うるる時ハ玉鉾の商人の道いせぐ〻て先立ぬ
世之丞ハ花ハ笠かぶり花ハ笠かぶりて金銀活中ハ荷ひ
社橋の建立書灯をとかし侍子共ハ家〻
駄深の如商ハ其身自由ハしてとゝせ毎日

遣ひ扇せども強多敵の内蔵何ハ其屋
さるばし度長崎ハ下ハ〻〻き廻の者も
とゝなる立月八月十三月八月十四日ハ
の月紙ハ花ひらくハ蟬也ハ我ハ〻〻ハ
月ハ夏ひやうの法ハ〻〻ハ濱の川舟大坂の南の岸ハ
ゝき鄭商の方ハ二三日の蟹入あるの内ハ真主
ぶり賜元の妹ゝ〻ゝ時金子天百両遣ゝ也
熟〻て役者子共の世の暮〻ハ〻〻ハ日ハ
雪の柳のごとし〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻
なり吹ハ時ハ鶏を〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ
京ハ住江戸ハ大坂ハ高槻碧一生涯も定法

何の罪なき銀もなげやりと其四郎が築山にて舟
だゝこまでおく難き風もあらして時津海浪をとる
さゞれ石は寸取の大溝に月に影入口の桜町を
見返る坊主がやなぎに通ふなりて来て宿に呂銭も
是めづらし・すぐに丸山にゆきて見る程に女郎屋の有様
聞およびしよりはまさりて一軒に八九十人も見せ
懸姿・唐人は是までまゐりて女郎好る事とや・恋
慕ふの中く人思見の程事も備こ居夜共に
其業を言くは飽ぞ枕をいかさ孫紛の白な人の
なまめく事は是や山狂毛は出鳩によふで盛ま正方
の町宿一も自由になよせ豊明の事長二廻の迷

京にても色川原色里にて一座せし人こそ世にめ
下て思ひゞしく女郎共に皆様なく御月に
島原の太夫遊女常に舞台に来て囃しかける
地遊もまた太夫腕書細して定家松風三井
寺のかまし三ぶ敷ためやかに物調子一際ひゞき
して其声やさしく又は腰すずき哉思や折哉
物語の藤の法に自然おかしく金の大間鍋を集こ
しの酒切顔を選とて其女三十五人にかんく
の出立石井の伺家ぞきよりも金の玉ぞときけや
揚のてわもひ葉を分す・岩井の水は千代ぞとて
舵も遊びの大振舞・我京にも三十五両の

鶴と燒鳥みして、きの文の書みせ一事も、今は
洞富みたりしを、俗も賑わて、ふ風俗〳〵と繁
昌して、都の地形なかこの風情ゞ見うひ〳〵ふ〳〵ぞ色ゝ
多和の世ゝ分れ杭みゝ尋らもしゝ、章この手ひ
持せゝ彩物をして、長地十二さか運ぶせば中より
きの文の衣裳人形、承て十七人、江戸で八人、大坂で
十九人、皮舞墨みの名書てゝ爲をよめいくの
仕出し、彩ゝき膏ゝ塗れ、ひとゝく賑て花みゝて
愛ハ離、そもハこなこ、ハ、はゝつゝ、ゝらしきハあゝば
長崎中書く詠め言一川

度責乃奥

合弐万五千貫目毎親ちずいぶん遣へと譲らもきる。
此書を八百紙書しそもかく今まで二十七年
ゆなりぬまもあるゆ廣き世界の楽所町あらば
諸めぐりて身ハいたるく楽みや川色ゆ川と海世
界今とゆ今あるゆ此程ハ新ハれしよハなし
宝玉書物もなし信念乃ハ水ハ川まで色乃の
中有ゆ来ひ火宅乃内のやゆと男事とゆらば
きでゆるゆくゆ玉ハゆ中割ゆ乃ハ玉ゆ乃て
男弱車乃青も車ゆうとく素乃ゆ木の枝なく
でハきちなく汐ゆ乃ゆ笑しう男物うれおもき

計ゆきあるゆ涙見乃びしゆ女乃かゆ強ゆ霜と
戴き家ゆハせハしき浪乃ゆちよゆ心服乃色め
目もるゆ傘ゆ愚く扇くゆ田ゆ乃せゆ形婦も
男乃乱ゆ入世界楽とならぬゆ川色で習門
と事も何ゆうゆ入ゆ色しゆ今まで形種
もく死ぐゆ乃ゆ喰ゆまでく儀ゆ乃ゆしても
ゆ鶏き道ゆ入雑しゆ行き身の行
未見ゆ何ゆなりとゆ成色しとゆ行ゆ形寶
と捨捨強ゆしゆ金子六千兩東山乃奥ゆく
恨埋めて其上ゆ宮ゆ治石紙色く形影乃清ゆ
ゆゆせくゆか乃石ゆ一首ゆゆ乃ゆて清水夕月形

紙帳の幌、其下に六子商の売物して、と、窺の
ふるき世の人、かかるものを見た、所はどこと、ものを
雖し、そもより世ゝ人ひとりあるの家、七人
後門あるを世、雖江の小嶋ゆく、新しき舟、
所世く、好色也と、多代記し、郷編笠の客、
是ハ山ゝの夏、苔の顆名磯の肺布や、綿幕ハ
色み、一女帝より、念記の品物をめい綾せて、
なる色、家畜のうちみハ、夫、不定のこゝぢ、大
緋みの女の髪、ちぢとしまぜ、さて墓所みハ、舟
よ新、と、ちち、牛房、暮、新、卵をいあらせ、櫓、夜の下
みハ、地黄丸、五十疊、女、長冊、武十箱、ゆんの玉三

百五十、阿蘭陀糸七子すぢ、生海鼠輪六百懸、水
牛の角二子五百、鴉の嘴三子四百、葦の巻八百、
枕繪、武百札、伊勢物がたり、武百部、横鼻禅百部、
の色鼠紙九百丸、まぐ長ものて、下子の油代
武百樽、山椒、菜と四百袋、瓜のこぢちの根を
子、木銀、綿、實、唐がらしの粉、牛膝百
竹、長竹、色く、糸ふくの、責、乃鼻とくの、え、
さて、又、男の、さ、なみ、衣、袋、産、衣も、数とう
所、え、こまぜ、二度、都へ帰、形、ゆくも、さまざま
しゝ、ぎ、金、肩の酒、もゝ、せバ、六人の者、たゞ
ゆき、寝へ、ものとゝ、何国へ、供ゝ、ゝ、事

ぎとゆふ。さまをバ浮世の達者。白拍子。戯女。
見乃こせし。事多し。我ゆくすめて。計男た。
あるゝ丹騨る。山もゝ多をバ。墨もち如護の鴉
丹ようて。抓どゝ乃如ゆ見せんとゆふ。ゆだいぜ
を也も。紙び。嬉書バ。肩。座しゝてそこ乃ゆゝと成爲ゝ。
を面く。二代男丹。生をとゝ乃ゝを後ゝ。ゝ。ゝひの
乃なをとゝ。惠風丹まうせ。侍を乃國ゝ。月
和ゝ。天。和二年。神世月乃末丹。
行方ゝ。ゝ。成丹也利

二柱農夫――矢八鏡盛孔
塗下地をたゆえ稲負鳥ハ
羽流なし牛乃事う也吾を世
里乃清玉栖流人尓
吉川孫乃事を宣耳漬――
帝乃尓拾さ――地尓云多
敬農次清代まもく稲穂

農水から和歌を作り
詩歌を西陵農に示す
共に農古へ語ハ難かく
言くまに出対詩義農評
示行帝桃の東流楽森
月示を〻ことの——帝を
余江亭——を酒めむの——流

文枕とかいや棄捨ら様——中示
摂合書の引彩式羽集ら蕉様
示ら陣ら帝稲飼を挽葉口
鳥耳讀くこうう分彩示姫
陽田ら和棄鶏の星大弟止沢
鍬代かちて放川せう——
落月菴西吟

天和二壬戌陽月中旬

大坂恩賞稽荒紙屋

孫兵衛可心板

天和二壬戌陽月中旬

調之